

(最優秀おはなしエンジェル賞 幼児・小学生低学年の部)

へんしん！ ダンゴムシ

小一・高岩 智志

ぼくは、よるにふとんでゴロゴロするのが大すき。フカフカのおふとんの上で、右にゴロゴロ。左にゴロゴロ。ななめにもゴロゴロ。きもちいいし、たのしいし、サイコー。お母さんは、「ふとんでゴロゴロしながらねると、あさダンゴムシになっちゃうよ。」っていうけど、へいきへいき。人がダンゴムシになるわけないよ。きょうもたくさんゴロゴロしてから、ぼくはぐっすりねむった。

「お母さん。ちよっときて！」

となりのふとんでねていたおねえちゃんのかえで、ぼくはぱちつと目がさめた。もう。あさからうるさいな。ぼくは目をこすろうと手をのばしたけど、とどかない。あれ？

「さとし。ダンゴムシになってる。」

おねえちゃんが、目を大きくしておしえてくれた。え？なんて？お母さんもやってきてぼくを見ると、「あちゃー。とうとうダンゴムシになっちゃったかー。」っていつてる。ぼくはいそいで、せんめんじよのかがみでじぶんを見た。ほんとだ。ダンゴムシだ。体の大きさは、人のときとおなじ。

「ええー？ 学校どうする？」

ぼくはあわててきいたけど、「しかたない。はやくあさごはんたべて、そのままいっついで。」とお母さんはふつうにいった。ちなみに、あさごはんはダンゴムシがすきなかれはだった。

「さとし、いそいで。」

ごはんをたべたあと、おねえちゃんと小学校へむかった。ダンゴムシの足はおそい。がんばってあるいているけど、すこししかすすまない。

「もう。しかたない。さとし、まるまって。」

おねえちゃんがぼくの体をツンツンとさわってまるくした。

「いい？　ころがすよ。」

ドドド：。おねえちゃんが、ぼくを大玉ころがしみたいにおしていく。ゴロゴロゴロ。あ、これあるくよりラクかも。

「ふう。ついたよ。」

おねえちゃんのおかげで、学校にはちこくしなかった。先生はおどろかなかった。

「お母さんからでんわがありましたよ。きょうは一日ダンゴムシですって。」

え？　それだけ？　クラスのみんなも、ちつともおどろかなかった。

「オレは3さいのときにダンゴムシになったことあるぞ。」とか「わたしは、おとまりのつぎの日にダンゴムシになったことある。」とか。みんな、ぜんぜんビックリしてない。ふーん。ダンゴムシになるってふつうのことなんだ。ぼくがいままでしらなかっただけみたい。

そのあとも、ぼくはふつうに学校ですごした。じゅぎょうのときは手をあげられないしエンピツももてなかったけど、クラスのみんながてつだってくれた。休みじかんはそとであそんだ。ぼくがまるくなって、ころがしドッジをしたりした。きゅうしよくはキャベツしかたべれなかったのがざんねんだったけど、とにかくたのしい一日だった。

「ぼく、あしたもダンゴムシのままがいいなあ。」

ぼんごはん（レタス）をたべながら、ぼくはきょうのことをはなした。おねえちゃんは「ええ。あしたもさとしをころがしながら、学校いくのイヤだよ。」といったけど、ぼくはぜんぜんへいきだ。きょうはとでもつかれたので、ぼくはふとんにはいるとすぐにねてしまった。

「さとし。あさだよ。」

おねえちゃんにおこされた。え？もう、あさなの？目をゴシゴシこすってから、ぼくは「あ！」とさげんだ。

「手がある。もともにもどってる？」

「そうだよ。きょうはダンゴムシじゃないよ。」

おねえちゃんがあんしんしたようにいった。あ、そうか。きのう、ふとんでゴロゴロしなかったからか！しまった。うっかりしてた。ぼくはまたダンゴムシになりたい。よし。また、きょうのよるから、ふとんゴロゴロがんばるぞ！



画：石井聖岳